

## 〈失われた時〉を見出すとき (一六〇)

木下 長宏

蕪村は、晩年に門人へ書き送った手紙で、こんなことを言っている。——「詩の意こころなども二重ふたえにき、を付つけて句を解かい候事あはれ多クあり、俳諧にもまゝ有事も」。

漢詩などは、文字面を追って読めてくる句意のほかに、もう一つ別の情景や史事を伝えている、そういう作品が多くある。俳句でもしばしば行われることだ、表面上の意味と隠されたメッセージと、その二つを読み解かなければ、その詩歌俳諧を真に味読したことはない、というのである。

これは、「山吹や井出を流る、鉋屑かんなくず」という句が、『袋草子』の「おもしろき故事を下心に」作ったことに触れ、これを「二重にき、を付」けると言い、作品の表面上の叙事的叙景的イメージは、その作品を詠むに当って踏まえた故事出典を理解して生きてくるものだ、と説いているのである。

確かに出典文献を知ることが、それはそれで考証学的面白味も加わり作品に厚みが出る。だが、こうして蕪村が言い

たいところは、いま目の前にある十七音からなる句が、あるメッセージとイメージを伝えていると同時に、もう一つ別のメッセージとイメージも読み取らせてくれるよ、俳諧の醍醐味はそこにあるよ、ということだったろう。

漢詩の場合も、その文字の音と義の組合せは、日本の歌や俳句の場合より複雑である。が、歌謡からこの音（声）と文字が生み出す語義の二重化を愉しむことは、日本列島に歌が生まれたときから行われていて、始めのうちは文字なぞなかつたから、声だけでその両義、多義の現われを楽しんでいた。やがて、歌謡を文字に記すようになると、声の両義と文字という形が音（声）に重なって生まれる面白さを見つける。

喩の技法はここから育った。記紀歌謡、万葉集にそんな歌がたくさんある。枕詞の成立も、ここから見えておかないといけないと思うが、古今和歌集になると、その声と文字が織り成す歌をジャンル分けする意識も成育してきた。「物名ものな」と

「俳諧」の部立がこうして共有された。

本家の漢詩がやっつてゐるから俳諧でもやっつていいではつまらない。本家のやっつてゐることを踏まえて、そこから自在に句境を遊ぶのでなければ、ということこそ蕪村の思いである。

蕪村が先の手紙で「二重にきゝを付て」と書いた平仮名の「きゝゝは、「効き」「利き」であり、「聞き」「聴き」でもある。意義を論じる場で実践している。そんな蕪村だから、その「二重にきゝを付」けるは「俳諧にもまゝ有事也」などと言っているが、これは蕪村一流の、それこそ俳諧的表現で、ほとんどの句でやっつてゐると思つたほうがいい。一句の底に隠した故事はこの「二重にきゝを付」ける効果を活かす手段である。近年の解釈書は、一句に一個の読解しか提示しないが、これは蕪村に対して失礼ではないかと思う。例えば、ほとゝぎす平安城を筋違すたがひに

という句。ほとゝぎすが鋭い声を放ちながら碁盤目の平安京を横切るように飛び去つて行つたね、といった解釈だけで完結させるのが現代である。表面の文字を拾つて行けば、それで解釈は成り立つ。この解釈に感興を盛り込むなら、この広い平安京の栄枯盛衰千年の時空ときぞらを杜鵑ほととぎすはひと声で掠め去つて行く、人間が長い年月をかけて築いた都も小さい自然の生き物には勝てないなあ、というところか。

杜鵑を語り歌う作例はたくさんあつて、蕪村はこの句へどんな故事を下敷にしたか、諸家の註を尋ねても、「山吹やで

蕪村が自註するような、納得いく文献は見つけ難い。芭蕉の「郭公ほととぎす声横たふや水の上」など、「平安城を筋違に」の発想にひと働はたらきしているに違いない。しかし、芭蕉の句が「二重にきゝを付」けていると言えるほど、句の骨や肉になつていそうにはない。一つの作品の味は、いま、ここにある十七音から成る句から出てくるのでなければ。出典を並べる解釈は、豪華な材料で調理したのに向に美味しく料理を食べさせられるのに似ている。求めるのは美味い一皿である。

蕪村が言いたかつたことは、彼の仕事のひとつひとつから、美味い一碗を味読するように、読む者一人ひとりが、自由に「二重にきゝゝ」を楽しむことが大切だ、ということだろう。そう思い直して「平安城を筋違に」の句を見直してみると、いろんなことに気が付いて行く。

まずは「平安城」だが、「平安城」は古くから「平安京」の別称であることは間違いない。だから、これは「平安京」と解して正解である。しかし、俳諧はそもそも権威ある正統を揶揄するところに根を持つてゐるのだから、とそんな解釈をあれこれ考えてみるのも蕪村を喜ばせるのではないか。

たとえば、「平安城」を「平安京の城」という意味でここに使つていないか。平安京の城というと、二条城、あるいは当時なら記憶に生きていた伏見桃山城。二条城は、姿は天守閣を持たない御殿に近く、「城」の気分ではない。そこで、この「平安城」を伏見桃山城に重ねてみると、この句は別の生

命をもらつたような表情を見せてくる。

なぜ、「はすかひに」と言わないで「筋違に」としたか、という問いが、やり過ぎない問いとなつて出てくるからである。この句を作る前だろう、蕪村は「筋違に上かみぎよう京過ぎぬほととぎす」の句を残している。「筋違」にはこだわりがあつたと読まねばなるまい。「筋違」は、道理に逸れたという意味もあり、土地の名でもある。伏見区深草に、現在は「直違橋すじがひばし」という町名が残っている。蕪村はここで「筋違に」という場所を指しながら、音は「はすかひに」という杜鵑の動きを彷彿させる。「二重にきゝを付」けているのである。

こういうところを踏まえると、この一句、平安京の坊城の外の伏見桃山城から、杜鵑が北へ、つまり平安京の方へ、筋違の町をよぎつて飛んで行くよ、というイメージが広がる。

筋違の北に伏見稻荷神社が位置し、その北に東福寺があり、ようやく十条通、つまり平安京坊城の南辺である。

では、なぜ蕪村は、こんな京の坊城の外から平安京へ飛んで行く杜鵑を詠もうとしたのだろう。

じつは、ここで故事を読み込む「二重にきゝを付」ける、が大きな役割を演じているのである。その昔、平安京の大宮人や女官らは、夏が来ると、杜鵑が飛んでくるのを待ち侘びた。徒然草一〇七段に、女房らが御所に入ってくる若い男たち杜鵑を見たかえ、鳴き声を聞いたかえ、とうるさく尋ねているやりとりを、ちよつと皮肉つぽく描写している。宮中

では大騒ぎするほど杜鵑が待たれていたので。

女房らを尻目に飛び去っていく杜鵑——こう読んで行くのと、「ほととぎす平安城を筋違に」の一句、「平安城」が二重の像を産み、なかなか厚みのある句となつてくるではないか。そして、この句は、連句の会のように、次の句を呼ぶ。

岩倉の狂女恋せよほととぎす

この句は「数ならぬ身はきゝ侍らず」の前詞があつて、さっきの一〇七段の話を下敷にしていることを示唆している。男達に杜鵑の鳴き声を聞いたかとしつこく尋ねる女房に、ある大納言が「数ならぬ身はえ聞き候はず」と答えた。堀川内大臣は岩倉で聞いたな、と答えた。大納言の答は女房たちを黙らせたはずである。これは統古今集に選ばれた源俊頼の「音せぬは待つ人からか郭公たれ教へけむ数ならぬ身を」を踏まえた答だったからである。一方、内大臣の答はただの体験報告で、こういう答を女房たちは喜ばなかつただろう。

一〇七段の兼好法師は、このあと、「女子と小人は養い難し」の論法を上塗りするような議論へ向かつて行くが、蕪村はそれには見向きもしないで、「数ならぬ身」と「岩倉」だけに興味を示して生まれたのが「岩倉の狂女」一句である。「数ならぬ身は……」をわざわざ前詞に置いたということは、この一句は、徒然草一〇七段よりも、その大納言が下敷きにした源俊頼の一首こそ、この句へ「二重にきゝを付」けているのではないか。「二重」の「二重にきゝ」である。

源俊頼の「音せぬは」の歌は、待つても待つても音沙汰ない人待つ女になりかわった一首である。待ち焦がれ、待ち焦がれ、どうせ「数ならぬ身」と自分を責める女への思いと、「岩倉」の土地の名が、蕪村のなかで出会った。

岩倉は、平安京の坊城の北の彼方にある。坊城の北東、少し外れたところには上終町と名付けられた地がある。「上」は京都では「北」を意味する。この北の果てのさらに北に深泥池があつてその池を囲む山の向こうが岩倉なのだ。

平安城を筋違に飛び去った杜鵑は、平安坊城を過ぎて、その向こうの岩倉へ行つてしまつたというわけである。

岩倉にある大雲寺は比叡山天台系の寺で、平安時代前期の創建。後三条天皇の皇女が狐に憑かれたとき、大雲寺の井戸水を飲んで治つた言い伝え以来、岩倉と言えば、京の人は脳を病んだ人の行く場所を連想する。現在も大雲寺周辺に病院がある。蕪村も「数ならぬ身」から恋に狂う姿を思い浮かべ、「岩倉」という言葉からは、「狂女」を着想したのだった。

人間が患う病の原因には二種類ある。ウイルスや細菌が原因の場合と、人為的に病者にさせられる場合とである。狂気は、ほとんどが人為的な要因によるもので、それも社会的弱者が権力の持ち主の都合で狂者に仕立てられることが多いから、女性が犠牲になる。謡曲に狂女物という作品群があるが、「隅田川」「三井寺」は自分の子が拐われて物狂う母の話であり、「花筐」は男（継体天皇）の都合で捨てられ、物狂

いを演ずる照日前。「班女」もまた男の身勝手に恋に狂う遊女花子の物語である。

「岩倉の狂女恋せよほと、ぎす」は、そんな物狂いの女に、「恋せよ」と呼びかける。これは誰の声だろう。

この句は「岩倉の狂女」「恋せよ」「ほと、ぎす」の三つの語句群から成つていて、それぞれの語群は、俳諧の韻律（俳諧の声が作る磁場）によつてつながれ一句を成しているが、各語群をつなぐ助詞などは欠いて配置されている。

「岩倉の狂女よ」とも言っていないし、「ほと、ぎす」は句末にぼんと置かれているだけで、「恋せよ」と「ほと、ぎす」が言つたという指示は、この十七文字の塊からは読めない。作者の声のように取れるが、それは、詩歌や物語を読むとその作品の登場人物を作者と同一視してしまう慣習が、そうさせるので、この句では、むしろそう読まないように「ほと、ぎす」が最後に置かれているようである。

「ほと、ぎす」が激しく鳴いて岩倉の空を飛んで行つたあと、その残響が恋に狂つた女の恨みと哀しみに応えるように、句を読む一人ひとりの心のなかに沁み渡る。

「恋せよ」と呼びかけるその女自身の恋の相手はそこに居ない。その空しさを、飛び去つてそこにはいない「ほと、ぎす」という五音に響かせている。狂者をこの世の適応不能者と見ないで、そこに、切実な、最も人間的な発露を感じとつて「恋せよ」と書きつけた蕪村を見つける。